

短 報

1991年と1992年に認められた高知県の大複殖門条虫症

鈴木了司 今村京子 熊沢秀雄

(掲載決定:平成5年2月17日)

Key words: Cestoda, *Diplogonoporus*, human cases, Kochi Prefecture

高知県の大複殖門条虫症については、すでに数回にわたって報告しているが(熊沢ら, 1981 a, b; 鈴木ら, 1985, 1988; 鈴木・今村1991 a), 1991年と1992年度に当教室が同定を依頼された条虫のうち, 7例が本虫であることを認めたので, それらについて報告するとともに, 1992年までの我が国の本症の発生状況を改めてまとめた。

以下それらを, 依頼された順に示すと,

1) 団ら(1991)が報告した症例で, 患者は安芸市在住の63才の男性。2~3日前からの下痢の後, 排便時に虫体の排出に気づき, 引っ張ったが切れたので, 1991年1月15日に高知県農協総合病院を受診。大腸内視鏡検査を施行したところ, 上行結腸より回盲弁を越えて伸びる, 白色紐状の動く虫体を認め, ガストログラフィン200mlを注入したところ, 2時間後に, 頭節のある長さ152.5cm, 幅9.0mmの未成熟虫体がえられた。更に Bithionol を内服させたが, 虫体の排出は認められなかった。魚介類の摂取状況は不明。

2) 森沢ら(1991)によって報告された症例で, 高知市在住の3才3ヶ月の男児。1991年6月4日と5日の両日に排便と共に虫体を認め, 近医を受診後, 虫体の一部を持って高知医大小児科を受診。長さ133.6cm, 幅9.0mmの, 頭節のない成熟虫体であった。自覚症状はなかった。約1ヵ月後の検便で陰性。本例は, 報告された中では最年少の症例である。幼児のため, 魚を生で食べる機会は少ないが, イトヨリダイ, シイラ, タチウオ, マグロ, タイなどを生で, もしくは火を通して, 排出日前の1ヵ月間に食べたという。

3) 鈴木・今村(1991 b)が報告した例で, 中村市在住の45才の男性。1991年5月始めから, 排便時に5回の虫体排出があり, 7月31日に長さ216.8cm, 幅15mmの, 頭節のない成熟虫体を持って県立西南病院を受診した。8月10日に Bithionol を投与したところ, 長さ57cm, 幅10mmの, 頭節のある虫体を排出した。臨床症状はなかった。カツオ, イカのほかにドロマ料理(イワシの稚魚をぬた, もしくは酢醤油で食べる)をよく食べている。

以下は鈴木ら(1992)が報告した症状である。

4) 須崎市在住の58才の男性。1992年1月20日朝, 長さ67.5cm(幅12mm), 半日後に約30cm, さらに半日後に約120cmの成熟虫体をそれぞれ自然排出。最初の排出虫体を持って高陵病院を受診。臨床症状としては, 軽い下痢と胃痛が認められた。頭節は持参した虫体には認めない。カツオ, アジ, サバ, イワシなどの海産魚を毎日のように食べている。

5) 高知市在住の36才の男性。約1週間, 下痢と腹部異和感があり, 1992年1月31日に約1mの虫体を排出して高知市民病院を受診。糞便検査で条虫卵が検出されたため, Bithionol で駆虫したところ, 頭節のある長さ259cm, 幅12mmの成熟虫体を排出した。ドロマ料理を含め, イワシの生食習慣がある。

6) 安芸市在住の60才の男性。芸西病院から検査依頼された虫体で, 2~3日前から下痢があり, 1992年3月15日食後の排便時に長さ24.5cm, 幅3mmの虫体を, 数日後に長さ122.5cm, 幅7mmの虫体(合計147cm)を排出した。どちらも頭節のない未成熟虫体であった。ドロマ料理を含め, 海産魚をよく食べている。

7) 野市町在住の38才の男性。1992年5月末から排便時に虫体を排出, 6月13日に排便と共に排出した長さ90cm, 幅10mmの頭節のある成熟虫体を持って野市中央病院を受診。自覚症状はない。患者はイワシの生食を含め, カツオなどの海産魚をよく食べている。

以上の7症例は, 虫体排出してから約1ヶ月後に検便を行ない, 虫卵陰性であることを確かめている。

この結果, 高知県では本症が40例に達した。筆者ら(鈴木・今村, 1991 a)は過去の大複殖門条虫の症例をまとめたが, それ以後1992年末迄の各地の報告例に上記7例を加えたものが Table 1 である。これら症例は我々の従来の報告と同様, Kamo *et al.* (1971) の表に準じて, 学会・論文等で最初に報告された日付順に並べてある。

前回の報告(鈴木・今村, 1991 a)では128番目の発表者名を板垣ら(1988)としたが, 同一症例を山根ら(1988)がその前に報告していたので著者名を変更した。

Table 1 Summary of cases of diplogonoporiasis. The previous list (Suzuki and Imamura, 1991a) has been changed as follows: 1) The authors for case no. 128 have been changed to Yamane *et al.* (1988) who preceded Itagaki *et al.* (1988); 2) the insertion of Hori *et al.* (1988) and Uranaka *et al.* (1989), cases not recognized by Suzuki and Imamura (1991a), has changed subsequent numbering. No. 165 and the cases that follow were known after Suzuki and Imamura's (1991a) publication

Case No.	Author	Patient				Worm found		
		Locality	Date found	Age	Sex	Length (cm)	Width (mm)	Scolex
128	Yamane <i>et al.</i> (1988)	Yamaguchi	Jun 1988	26	M	248.0	6.1	+
129	Hori <i>et al.</i> (1988)	Shizuoka	May 1988	40	M	232.0	13.0	+
130	Yasuraoka <i>et al.</i> (1989)	Ibaraki	Aug 1988	57	M	490.0	15.0	-
131	Uranaka <i>et al.</i> (1989)	Tochigi	Sep 1988	39	M	290.0	15.0	+
132-164*								
165	Dan <i>et al.</i> (1991)	Kochi	Jan 1991	63	M	152.5	9.0	+
166	Nakamura <i>et al.</i> (1991)	Saitama	Mar 1991	69	F	100.0	?	-
167	Morisawa <i>et al.</i> (1991)	Kochi	Jun 1991	3	M	133.6	9.0	-
168	Tsuge <i>et al.</i> (1991)	Aomori	May 1989	48	M	?	?	?
169	Akao <i>et al.</i> (1991)	Shizuoka	? 1991	70	M	15.0	17.0	-
170	Akao <i>et al.</i> (1991)	Aomori	? 1991	46	M	10.0	20.0	-
171	Akao <i>et al.</i> (1991)	Chiba	? 1991	53	M	10.0	18.0	-
172	Niimura <i>et al.</i> (1991)	Chiba	May 1990	58	M	160.0	21.0	-
173	Niimura <i>et al.</i> (1991)	Chiba	Jun 1991	43	M	405.0	13.0	+
174	Suzuki & Imamura (1991b)	Kochi	Jul 1991	45	M	273.8	15.0	+
175	Takao <i>et al.</i> (1991)	Fukuoka	Mar 1991	76	M	74.0	17.0	?
176	Yamamoto <i>et al.</i> (1992)	Saitama	Jun 1992	50	M	640.0	7.8	+
177	Ando <i>et al.</i> (1992)	Mie	Jun 1991	52	M	78.0	6.0	+
178	Kimata <i>et al.</i> (1992)	Wakayama	May 1987	49	M	310.0	14.0	+
179	Kimata <i>et al.</i> (1992)	Osaka	Jul 1992	51	M	100.0	10.0	+
180	Suzuki <i>et al.</i> (1992)	Kochi	Jun 1992	58	M	217.5	12.0	-
181	Suzuki <i>et al.</i> (1992)	Kochi	Feb 1992	36	M	359.0	12.0	+
182	Suzuki <i>et al.</i> (1992)	Kochi	Mar 1992	60	M	147.0	7.0	-
183	Suzuki <i>et al.</i> (1992)	Kochi	Jun 1992	38	M	90.0	10.0	+

*: Same as in Suzuki and Imamura (1991a) except that the case numbers are shifted by 2.

また、前回見落としていた掘ら (1988)、および浦中ら (1989) の症例を129番目と131番目にそれぞれ挿入した。このため安羅岡ら (1989) の症例が130番となったほか、旧130番以降が2番ずつ繰り下がり、前回の最後 (旧162番) は164番となった。現在までの本症例数は183例となる。なお寺田 (私信) によれば、このほか静岡県で症例がある。

Table 1に基づき、各県別に患者数を表わしたものが Fig. 1 である。西南日本では高知県のほか福岡県 (高尾ら, 1991) や近畿地方 (安藤ら, 1992; 木保ら, 1992) で症例が追加されている。上記の静岡県を別とすれば、高知県は症例数が我が国でもっとも多く、しかも、ほとんどが近年に増加した症例であることは興味深い。また、

かつては神奈川県が長い間、症例報告の北端であったが、その後関東地方各地および福島県に本症が認められ、さらにこの2年間では、青森県の2症例を始め (柘植ら, 1991; 赤尾ら, 1991)、埼玉県の2症例 (中村ら, 1991; 山本ら, 1992)、千葉県の追加3症例 (赤尾ら, 1991; 新村ら, 1991) など本症患者の分布域が次第に北へと拡大していることは注目し値する。感染源を解明するうえで、この点は今後さらに検討する価値があるかもしれない。今回の7症例では、患者は海産魚、特にイワシを好んで食べていたが、それ以上のことは未だ不明である。

英文要旨を添削頂いた高知医科大学英語教師 Dr. Dana Roripaugh に感謝する。

- 2) 安藤勝彦・佐藤之義・三浦 健・鎮西康雄・坂井利之・野田雅俊 (1992) : 三重県における第2例目の大複殖門条虫症. 第48回日本寄生虫学会西日本支部大会, 講演要旨 p 77, 寄生虫誌, 42(2・補) 165(1993).
- 3) 団 博文・竹内栄治・米田和夫・竹原浩子・坂内一馬・岸野達志・大口秀利・中山拓郎・安岡 恒・鈴木了司 (1991) : 内視鏡にて観察し得た大複殖門条虫の1例. 第64回日本内科学会四国地方会, プログラム p 12.
- 4) 堀栄太郎・市川紀俊・仁科正実・糸山進次 (1988) : 焼津市でみられた大複殖門条虫症の1例. 第15回埼玉医学会総会, 埼玉医科大学誌, 16, 100 (1989). 埼玉医科大学誌, 16, 227-230 (1989).
- 5) 板垣ら (1988) : 山根ら (1988) を参照.
- 6) Kamo, H., R. Hatsushika, and Y. Yamane (1971) *Diplogonoporus* and diplogonadic cestodes in Japan. *Yonago Acta Medica* 15, 234-246.
- 7) 木俣 勲・宇仁茂彦・N. M. アブデルマクソウド・高橋三佳・大沢佳代・井関基弘 (1992) : 大複殖門条虫症の2例. 第48回日本寄生虫学会西日本支部大会, 講演要旨 p 78, 寄生虫誌, 42(2・補) 165-166 (1993).
- 8) 熊沢秀雄・鈴木了司・大倉俊彦 (1981 a) : 高知県における大複殖門条虫症の第4例. 日本熱帯医会誌, 9, 1-7.
- 9) 熊沢秀雄・鈴木了司・近藤慶二・塩見文俊・田口博国・紙谷晋吾・井上文之 (1981 b) : 高知県における大複殖門条虫症2例. 寄生虫誌, 30, 113-120.
- 10) 森沢 豊・岡田泰助・倉繁隆信・鈴木了司 (1991) : 大複殖門条虫の幼児例. 第44回高知県医師会医学会, 抄録集 p 24.
- 11) 中村真一・横山 総・藤倉信一郎・田宮 誠・塚田真知子・広井克之・山本徳栄・高岡正敏・影井 昇 (1990) : 埼玉県における複殖門条虫感染の第1例について. 第2回臨床寄生虫研究会. 抄録集 p 27. 臨床寄生虫研究会誌, 2, 93-95 (1991).
- 12) 新村宗敏・小林 仁・畑 英一・高沢 博・大脇佳則・早野真史・福田哲也・吉田象二 (1991) : 千葉県でみられた複殖門条虫症の2例. 第51回日本寄生虫学会東日本大会. 講演要旨集 p 30, 寄生虫誌, 41(1・補) 81-82 (1992).
- 13) 鈴木了司・今村京子 (1991 a) : 高知県の大複殖門条虫症-12例の追加-. 日本熱帯医会誌, 19, 15-23.
- 14) 鈴木了司・今村京子 (1991 b) : 高知県における大複殖門条虫症3例の追加. 第47回日本寄生虫学会西日本支部大会, 講演要旨 p 67, 寄生虫誌, 41(2・補) 162 (1992).
- 15) 鈴木了司・今村京子・熊沢秀雄 (1992) : 高知県における大複殖門条虫症の4例の追加. 第48回日本寄生虫学会西日本支部大会, 講演要旨 p 78, 寄生虫誌, 42(2・補) 166 (1993).
- 16) 鈴木了司・今村京子・熊沢秀雄・岡村宣典・中川佳子 (1988) : 高知県の大複殖門条虫症8例の追加. 日本熱帯医会誌, 16, 285-291.
- 17) 鈴木了司・岡村宣典・熊沢秀雄・今村京子 (1985) : 高知県における大複殖門条虫症. 寄生虫誌, 34, 431-439.
- 18) 高尾善則・福岡利英・宮城博幸・鶴田 修 (1991) : 福岡県における大複殖門条虫症(第6例目)と米子裂頭条虫症例について. 第44回日本寄生虫学会南日本支部大会. 講演要旨 p 19, 寄生虫誌, 41(2・補) 172 (1992).
- 19) 柘植光夫・副島靖雄・森山裕三・東野治仁・小枝淳一・副島健二・駒井立子・田村好弘・宇野良治・中村 豊・今田了治・神谷晴夫 (1991) : 裂頭条虫の3例(大複殖門条虫症1例を含む). 青森市民病医誌, 4, 105-109.
- 20) 浦中妙子・吉田 健・渋谷敏朗 (1989) : 東京圏でみられたガストログラフィンで完全駆虫した大複殖門条虫症の1例. 第385回日本内科学会関東地方会, 日本内科学会誌, 79, 1088 (1990). 印刷局医報, 36, 127-132.
- 21) 山本徳栄・高岡正敏・崎村恭也・足立京子・関戸定彦・影井 昇・堀栄太郎 (1992) : 埼玉県における大複殖門条虫症の第二例について. 第3回臨床寄生虫研究会, 抄録集 p 33.
- 22) 山根泰三・板垣国昭・遠藤隆二・上田静雄 (1988) : 大複殖門条虫症の1例. 第42回長北医学会, 山口県医学会誌, 23, 215-216. 板垣国昭・数田行雄・遠藤隆二・山根泰三・上田静雄 (1988) : 山口県における条虫感染症二例について. 山口衛生公害センター業績報告集, 9, 62-66.
- 23) 安羅岡一男・入江勇治・西成田眞・小泉昭雄 (1989) : 茨城県における大複殖門条虫の一例. 第4回寄生虫疾患臨床検討会. 安羅岡一男・入江勇治・大前比呂思・西成田眞・小松義成・小泉昭雄 (1992) : 茨城県における大複殖門条虫の第1例. *KOLBEN MEDIKA*, 13, 16.

Abstract

DIPLOGONOPORIASIS IN KOCHI PREFECTURE BETWEEN 1991–92

NORIJI SUZUKI, KYOKO IMAMURA AND HIDEO KUMAZAWA

*Department of Parasitology, Kochi Medical School,
Nankoku, Kochi 783, Japan*

Seven cases of human *Diplogonoporus grandis* infection were found in Kochi Prefecture between 1991 and 1992. A list is given summarizing all cases of human diplogonoporiasis known in Japan after the publication by Suzuki and Imamura (1991a). Kochi has risen to the top prefecture in prevalence, with a total of 40 reported cases. Geographic aspects, especially recent increase in the number of reports from Northern as well as Eastern parts of Japan, may help to restrict possible sources of infection.